

創刊110周年記念

誇れるふるさと

24地区リレー

〈vol.24〉

〈船木③ 小学校歌〉

1872年の創立から昨年で150周年を迎えた船木小（徳田修二校長、124人）。1946年に作られた校歌は半世紀以上も歌い継がれ、船木で育った人の共通の歌として親しまれている。

校歌

- 一 ゆかりは遠く 雲はるか
大木が森の くすの香よ
古き船木の 名をとめて
明治五年の この声
- 二 ああ堂城の 丘の上
仰ぐ朝日に もえ立てば
有帆の川の ひびきあり
いのちはかよう 船木校
- 三 集えひとつに 声として
はげむ学び舎 はばたきて
古き船木の 新しく
我等明日あり 眉若し



船木小

地元愛する子どもたちの成長願う

作詞は長谷川埋木（うもれぎ）こと卒助さん、作曲は広中策さん。長谷川さんは52年に船木町長に就任。最後の町長と

作詞は最後の船木町長

して合併後の町名を「楠町」と提案した人物だ。2番は堂城ヶ丘の上に朝日が映え、地区を流れている有帆の川の音が響く。資料は残っていないといふ。歌詞には、地区の自然が盛り込まれている。1番の「大木が森のくすの香よ」は、学校が大木森住吉神社の西側にある。校歌について徳田校長は「この声」のことは漢字で「呱呱」。生まれたばかりの赤ん坊の泣き声を指し、1872年に開校の産声を上げたことを伝えたこととを記している。この声のこは漢字で「呱呱」。生まれたばかりの赤ん坊の泣き声を指し、1872年に開校の産声を上げたことを伝えたこととを記している。

船木小の目指す学校像は「希望にあふれる学校」。やる気・元気・本気・ふなき・やる気があれば本気を出せる・本気を出せば元気になれる！」。子どもたちは地域を愛し、人を大切にすることを育んでいる。学年の壁を越えて仲が良く、上級生が下級生に声を掛けたら、アドバイスしたりする姿が頻繁に見られる。

地元の人々からは校歌の意味や由来について学び、卒業式などでは半世紀も前の人と同じ歌が歌える喜びをかみしめている。

か」と推測している。